

令和元年度 きのさき見て歩き 第1回

「温泉寺御本尊参拝と弁天山」

実施日 令和元年6月7日（金） 9:30～13:45

講師 坂田 文一郎氏（城崎文化協会会長）

<弁天山とその周辺>



弁天山は、約 2000 万年前に大陸の一部が日本側に移動したり日本海ができたところに噴出したと考えられる火山岩でできている。

弁天山は、江戸中期の「温泉寺縁起図」には、円山川の中にある離れ小島のように描かれている。この島の古名は、児島、神楽山と呼ばれていた。弁天山を構成している岩石には、火山岩が冷えるときにできる流紋も見られる。

弁天山は温泉寺縁起の中には、「奈良の長谷で未完成のままとなって海に流された十一面観音が流れながれて観音浦につき、湯治に来ていた観音の仏師、稽文が見つけた道智上人に祀りを託した。道智上人はこの弁天山に草庵をつくりお祀りをすると、観音の額から一条の光が放たれ、今の甘露峰の中腹を照らした。道智上人はそこに庵を建て、十一面観音を本尊として祀った。」とされている。

<越中次郎兵衛盛継碑>



弁天山の頂上に、越中次郎兵衛盛継の碑がある。

壇ノ浦の落ち武者で、侍大将であった。

これは南北朝期応安元年（1368）の宝篋印塔で、現在豊岡市指定の文化財となっている。

この塔は、松ヶ崎の船着き場→児島弁天の下→地藏湯前→東山公園→弁天山山頂 と時代によって位置が変化している。

<まんだら湯>



まんだら湯の碑

「南無妙法蓮華經 日眞」

養老年間に道智上人によって温泉が湧出したことと、その後、湯が沸騰して近づけなくなったとき、日眞上人によって大曼荼羅を泉底に沈めたところ平温にもどったという「まんだら湯」の由来が記されている。

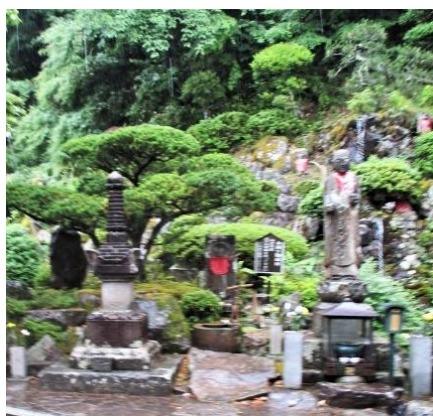


吉井勇（1886～1961）の歌碑

「城の崎の湯に浴むときはうつし世の愁ひかなしみすべてわするる」

昭和 8 年、ゆとうや旅館に宿泊。昭和 9 年、32 年にも来遊。この句のほかにも「城崎旅情」として一連の句を詠んでいる。

<極楽寺>



臨済宗大徳寺派に属する寺。

応永年間に開かれ、その後荒廃していたが、江戸時代に沢庵禅師によって再興された。

<温泉寺参道>



薬師寺から山門までの参道の両側には、湯治によって病が治った人たちによって寄付された灯籠が並んでいた。

山門横には、八十八番札所巡りの順路を示す札所石も。

<薬師堂>



正面唐門は、江戸時代文化年間の匠の粋を極めた透かし彫りの彫刻や木組み利技が見える、総檜造りのお堂。

中の拝殿では、格子天井の花や奉納額は色鮮やかな麦わら細工で仕上げられており、城崎の伝統工芸の麦わら細工が盛んであった様子もうかがえる。

<山門から本堂までの参道>

石段が続く温泉寺までの参道は、石造品、椎の古木群、歌碑など、文化と自然の宝庫。
楽しい道であった。



写真左

山口羅人の句碑「暮行くやあしたの人の初桜」

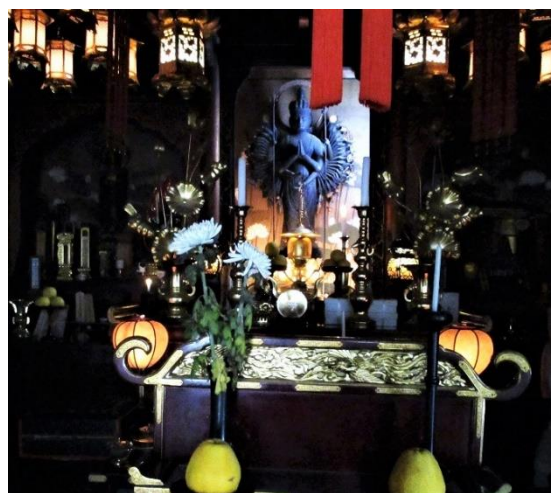
写真下

加茂季鷹の歌碑

「朝な夕な末の世かけて世の夢もうちおどろか
す鐘の声かも」



<温泉寺>





持仏堂で、温泉寺についてのいろいろな話をうかがう。温泉寺の千手観音像は、実際に千本の手を持ったもので、現在も 834 本残存しているそうだ。

その後、現在ご開帳中の（2021 年 4 月 24 日まで）御本尊十一面観音立像を拝観する。御手に結ばれている五色の紐は、本堂の外で白い紐と結ばれており、山門まで続いている。この紐にさわれば、本堂まで上がることもできない人でも参拝したことになるという。